

Information

【インフォメーション】

図書館利用案内《学外の皆さんへ》

休館日 日・祝日 12月28日～1月4日 藏書点検期間 メンテナンスなど

利用時間 平日／9:00～21:00 土曜日／9:00～17:00（入館の際は、受付まで）

館内閲覧 自由にどうぞ。図書、雑誌、新聞、ビデオなどがあります。

館外貸出 登録の際には身分証明書（現住所が確認できるもの）が必要です。
貸出冊数と期間は、5冊2週間です。

図書返却 図書を返却するときには、「図書貸出券」は不要です。
閉館時には、事務棟入口のブックポストにお返しください。

コピー 館内のコピー機でコピー可能。但し、著作権法で許可された範囲内でのコピーとなります。
コピー代金は有料（1枚10円）小銭を用意してきてください。

蔵書検索 図書館のホームページをご利用ください。

文献検索 医中誌等データベース・電子ジャーナルを利用できます。
利用前にカウンターまでお越しください。

*利用者の皆様の利便性を考え6月末を目処にホームページのリニューアルを計画中ですので、ご期待ください。

平成29年度 学年暦

4月	4/3～5 ガイダンス等
	4/5 入学式
	4/6～ 前期授業
	4/7 (午前) 健康診断 (午後) 新入生オリエンテーション
5月	5/2 交通安全講習会
	5/13・20 内科検診
6月	6/17 ホームカミングデー
	6/20 開学記念日
7月	7/31～8/4 前期試験
8月	8/5・6 第1回オープンキャンパス
	8/9 夏季休業日 (助産学専攻は8/31まで)
9月	9/9 助産学専攻科入試 本学推薦枠 大学院入試 (9/3～10/10 えひめ国体)

10月	10/1～ 後期授業
	10/20 防火訓練
	10/21・22 学生祭・第2回オープンキャンパス
	(10/28～30 全国障がい者スポーツ大会 えひめ大会)
11月	11/18 学部 推薦入試・社会人特別選抜入試
	11/19 助産学専攻科入試 県内推薦枠・一般
12月	12/9 第3回オープンキャンパス
	12/27～1/3 冬季休業日
1月	1/13・14 大学入試センター試験
2月	2/5～9 後期試験
	2/25・26 学部 一般入試 前期日程
3月	3/12 学部 一般入試 後期日程
	3/19 卒業式・修了式
	3/20～31 春季休業日

詳細な学年暦はホームページをご参照ください。
<http://www.epu.ac.jp/campus/calendar/index.html>

広報誌「砥礪(しれい)」についての意味

『砥礪(しれい)』とは、「①砥石(といし)②ときみがくこと」とあり、さらに「学問、修養などを高めようと努力すること【大辞泉: 小学館】」などの意味があります。平成16年に大学が開学して1年経った平成17年に、本学の位置する砥部町にちなみとともに、大学広報誌の名称としてふさわしいということで多くの賛同を得て決定しました。

公立大学法人 愛媛県立医療技術大学

〒791-2101 愛媛県伊予郡砥部町高尾田543番地
TEL 089-958-2111 FAX 089-958-2177
ホームページ <http://www.epu.ac.jp/>



編集後記

第13号愛媛県立医療技術大学広報誌「砥礪」は、内容を大幅に刷新致しました。「医技大探訪」では、4名の先生にご自身の研究活動等の紹介を通して人柄を感じていただき、「社会で活躍する医技大DNA」においては現在の医技大の前進である愛媛県衛生検査技師養成所から現在の愛媛県立医療技術大学を卒業され、愛媛県内で活躍されている卒業生をとりあげ、その活躍ぶりと皆様のすぐ側にいることを知っていただけたらと言うことで企画致しました。気楽な気持ちで楽しく読んでいただけたらと言う思いで編集いたしました。

今後とも当大学の活動にご協力頂ければ幸いです。

広報委員会委員一同



愛媛県立医療技術大学広報誌 SHIREI

2017. June
13号



基礎教育講座講師
内藤真帆先生

首都の市場にて。豚は最も財産価値が高い

2016年4月、愛媛県立医療技術大学に着任しました。英語や国際文化コミュニケーション等の科目を担当しています。

愛媛県に赴任して私が最も驚いたことは、愛媛・岡山・広島・香川の島々を巡回する「診療船」の存在でした。これは瀬戸内海に点在する医療機関の乏しい方々に等しく医療・保健を届ける船です。最新機器を搭載しており、乗船した医師や看護師、臨床検査技師らが診療・検診にあたります。

私が言語調査を行うヴァヌアツ共和国のツツバ島もまた医療機関が無く、年に一日だけ副都心の病院から看護師が一人、訪問診療に来ます。ジャングルを耕し自給自足の生活を送る島民にとって、この無償の診療は一年間分の不安を解消できる貴重な機会です。

訪問診療の日が決まるとツツバ島は慌ただしくなります。住民およそ500人の島には電気も電話も無く、さらに彼らの言語には文字も無いため、文書ではなく口伝で隣人に、または飛脚のように子どもを他の村へ走らせて、人から人へ村から村に往来します。

訪問診療の日が決まるとツツバ島は慌ただしくなります。住民およそ500人の島には電気も電話も無く、さらに彼らの言語には文字も無いため、文書ではなく口伝で隣人に、または飛脚のように子どもを他の村へ走らせて、人から人へ村から村に往来します。

流にあつて、医療現場でも語学力のみならず異文化への理解が不可欠となりつつあります。こうした社会の変化を見据え、人々に安心を届けられるよう、授業では実践力や広い視野を養うことをめざします。

内藤真帆（ないとう・まほ）鹿児島県生まれ。東京女子大学卒業。京都大学院修了、博士（人間・環境学）。専門は言語学。日本学术振興会特別研究員（P.D.）、大阪女子大学（英語・大阪大学大学院）（オセニア）言語などを経て愛媛県立医療技術大学講師。2011年に日本言語学会論文賞を受賞。2012年に新村出記念財団研究奨励賞を受賞。2012年より日本言語学会事務局委員。

へと訪問診療の情報を広めてゆきます。

いよいよ診療当日。急ぎよ診療室となる小学校には、朝早くから診察を待ちわびる人々で長い列ができる。小舟で看護師が到着するや否や開院です。経験を積んだ看護師は、薬箱に収まるほどの医薬品だけで全てをまかねます。「歯が痛い」と訴える人は即座に麻酔を打ちベンチで歯を抜くなど、看護師はいかなる相談にも迷いなく対応します。そして日が暮れる前には全てを終えて、看護師は夕映えに染まる海を小舟で帰つて

ゆきます。人々はいつまでも手を振つて見送ります。

訪問診療の無い364日、ツツバ島の人々は、例えば怪我で出血した時には火をおこし、傷口を灰で塞ぎ殺菌、乾燥させます。その後、蝶による感染を防ぐため、傷口に植物の葉を巻き付け蔓で縛つて治癒をはかります。

また、首長の親族がとつぜん寝たきりになつたときのこと。不調の原因が分からぬいため、親族一同は手をつけなき、その中心に月明りが映るように雨水を置いて一心に水に祈りを捧げま

移動手段は小舟



看護師の訪問診療

安心を届ける



居候させてもらった首長宅



副都心にて伝統衣装の若者たちと儀式の踊りの後に



【図2】重い部分を避けて隙間に手を入れる



【図1】リフト（床走行式）

死なせることなく道後から砥部への移転を果たされた上に、あの頃子供達に語られた想いを叶えたことが綴られていました。この目で見すにはいらっしゃませんでした。

広々とした、自然に近づけた空間。のびのび、いきいき暮らしている動物達。餌の自販機は、計量もできるので食べ過ぎが防



【図5】「生活環境整備のための福祉用具の使い方」窪田静総監修



【図3】授業で【滑る手袋】の使い方を教える

げ、しかも収入になるのです。自販機から鰯を買ってアシカに投げた時の興奮は、昔動物園教室で体験したものと同じでした。「やった!! 激しい!!」感動とともに、「地方公務員として、これを実現されたんだ」という、小学生では到底解らない感慨を覚える年齢になっていました。

多くの不自由を抱えて動物園

窪田 静（くぼた・しづ）
地域・精神看護学講座准教授
看護師 福祉用具プランナー
筑波大学大学院教育研究科リハビリテーションコース修了
医療法人財団健和会柳原病院（内科病棟・外来看護課・地域看護課）、在宅介護支援センターを経て、健和会補助器具センター所長（～2008年9月）
2002年～2004年 日本社会事業大学非常勤講師
2008年～2010年 東邦大学大学院非常勤講師
2003年～現在群馬大学非常勤講師
2008年10月から現職



授業（福祉用具演習）

で暮らす動物たちに、山崎先生が誓つたのも、生活環境整備だつたじゃない!? 拙著のサブタイトルそのものです（図5）。尊敬する恩師との共通点への気付きに、涙うるうる、心はほかほか。へこんだら、これからは砥部の山を眺めて勇気をもらおう♪ そう思いました。



地域・精神看護学講座准教授

窪田 静 先生

コペンハーゲンの靴屋さんで。紅茶とクッキーの試食サービスをいただきながら



2017年3月 デンマークの病院視察（左からChristian Krogh-Jeppesen氏、松本泰知氏、Midori Fischer氏、著者、Mette Staffe氏）



基礎検査学講座教授

北尾孝司先生

臨床検査技師教育の歩みと今後の展望

臨床検査技師教育は、1958年4月23日「衛生検査技師法（法律第76号）」の制定に基づき「衛生検査技師養成指定規則」の施行により始まった。1970年5月の「臨床検査技師、衛生検査技師等に関する法律」の改正により、現在の「臨床検査技師」という名称が使用されるようになり、血液などを用いた検体検査だけではなく、心電図検査や脳波検査などの生理学的検査や診療の補助として採血ができるようになった。この改正に伴い教育も3年以上に変更された。

1988年4月には医学の進歩・発展に伴い、医療従事者についても医療水準の高度化に対応した高い資質が要請されるようになり、専門学校における臨床検査技師教育から愛媛県立医療技術短期大学臨床検査学科（定員20名）として新たなスタートを切った。2004年4月には、豊かな人間性と高度な専門知識・能力を備えた人材の育成を図ると共に、県内の保健・医療分野における教育・研究・研修の拠点として中心的な役割を積極的に担い地域社会に貢献することを目的として、愛媛県立医療技術大学に移行され現在の保健科学部臨床検査学科（現在定員25名）として、大学において4年間の臨床検査技師教育がスタートした。201

4年4月には、大学院保健医療学研究科医療技術専攻（定員3名）が開設され更なる発展を遂げている。教育にも関係する「臨床検査技師等に関する法律」の改正では、2014年において、「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」に伴い法の一部が改正された。2015年4月1日から医師等の指示の下に診療の補助として、インフルエンザなどの検査のために鼻腔・

咽頭拭い液の採取および細菌・真菌感染症などの検査のために皮膚・体表および口腔の粘膜および病変部位の膿を採取するなどの検体採取ができないようになつた。今回の法改正の理由として、患者からの検体採取は検査の一部であると考えると、検体採取を検査の一環として行う事で、高い検査精度と迅速な対応ができると期待されている。

また、「チーム医療の推進」のな

かで、臨床検査技師として期待に応

えることができるような人材育成が求められている。チーム医療の一端を担う臨床検査技師は、正確な検査結果を出すことは勿論であるが、病態および検査法の原理について熟知しておくことにより得られた検査結果の示す意味を理解し、受診した患者さんの病態を正しく判断するための検査情報として臨床側に還元する必要がある。例えば、検査結果に異常値がでた場合において疾患によるものなのか、それとも検査方法の測

定系の問題なのかについて、自身で考えられる能力が求められる。さらに、検査方法についても発展的に捉え改良・開発を行える能力を身につけた臨床検査技師が求められている。したがつて、これらの能力を備えた臨床検査技師を育てていく必要がある。

北尾 孝司（きたお・たかし）
愛媛県立衛生研究所勤務後、愛媛県立医療技術短期大学助手、愛媛県立医療技術大学准教授などを経て平成29年4月から現職。専門は臨床微生物学





町や保健所の保健従事者と一緒に地域アセスメントミーティングを開催



平成14年から本学で継続して開催されている自主学習会の一風景。
県内の保健師が多く参加しています。



平成29年1月に仙台で開催された日本公衆衛生看護学会で
保健師さんたちとポスター発表

現場と地域の健康課題解決に取り組める「保健師」を目指して

研究成果を還元できているかなと感じています。また、昨年度からは科学研究費による「住民の出生世代別健康新規予測に対応した生活習慣病教育教材の開発」に取り組んでいます。生活習慣が異なる各出生世代の健康新規予測に向け、生化学検査値の世代間差を活用し、健康新規を将来予測する視点を養える教材開発が目標です。この3月までは、県内複数自治体の健診データ分析に携わり、地元の保健師さんや栄養士さんから地域住民の考え方や生活体

験を聞かせてもらい、保健所の力も借りながら地域の健康状況推移を可視化していきました。今年度は、その保健師さんたちが地域を見るまなざしや地域の健康課題の捉え方を掘り下げて整理し、教材を考案することを目指しています。大事にしているのは、この愛媛県で10年以上前に行われた取組みを活かすことと、やはり現場で活用してもらえるまとめをすることです。

振り返ると、愛媛県で多くの出逢いを得て、愛媛県ならではの強みに助けられ、この仕事を続けられています。この幸運を感謝するとともに、引き続き現場と一緒に活動し、地域の健康課題解決に取り組める「保健師」でありたいです。そして、新たな意見を還元できるよう、これからも地域に足を運び続けます。



「保健師」というライセンスを取得し、地域をフィールドとして仕事を始めながら、気がつけば15年以上が経ちました。出身は高知県ですが、愛媛県での生活も15年が過ぎ、今では土佐弁よりも伊予弁の方が口に馴染んでいます。縁あって愛媛県にフィールドを移し、ある日、初任地の保健所内で回覧されていた一冊の報告書に出逢いました。当時の愛媛県健康増進センター（S50・9～H19・3）の新山徹二所長がまとめられた「愛媛県の病因別死亡の状況－昭和58年（平成14年）」です。その中では、生活习惯病関連の主要疾患別標準化死亡比が当時の県下70市町村別にマッピングされ、5年毎の推移が示されていました。現在でこそ主流となりましたが、当時は複数疾患の長期推移が広域的に分析された研究は大変貴重だった上に、視覚的な見せ方が分かりやすく、「愛媛ではこんなことまでしているんだ」と本当に驚きました。幸運にも次の異動先で、その新山先生が携わっていた愛媛県内市町の基本健康診査データのまとめをお手伝いする機会に恵まれました。この時、先生が「現場の保健従事者が活用できる見せ方にしたい」と繰り返しあつしやられていたことが、今の自分が大事にしたいことに通じています。

平成24年から現在の職場に勤めていますが、宮内清子前学部長や野村美千江看護学科長らの支援もあり、大学に移つてからも現場の保健師さんと一緒に仕事をする機会に多く恵まれています。自主学習会の定期開催や県の事業評価等に関わさせていただきながら、ここ数年は学会や論文発表もコラボし、わずかながらも県内に





石鎚天狗岳に初登山（中央の赤いレインスーツが筆者）



筆者（中央）と「らくさぶろうさん（左）、ひめさぶろうさん（右）」
愛媛県臨床検査技師会主催による「らくさぶろうさん」の特別講演会にて

学校教育の進化、技術の進化、医療の進化：進化し続けていく将来、医療の世界で臨床検査技師の立場が開かれたものとなっていることを祈念してやまない。
ところで私の来年の講義は進化しているのだろうか…。



検体分析の自動化が進み検査室は大型の検体分析器が所狭しと並んでいる。



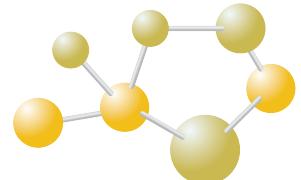
採血室：正確な検査データを得るために採血業務は臨床検査技師の仕事の一つとなっている。

森 いづみ
昭和55年（1980）愛媛県立北宇和病院検査部 入職 技師補
平成5年（1993）愛媛県立中央病院検査部（主任・生化学検査室）
平成20年（2008）愛媛県立中央病院検査部（担当係長・検体分析G）
平成22年（2010）愛媛県立中央病院検査部（副係長兼係長・生理検査室）
平成25年（2013）愛媛県立中央病院検査部（検査部技師長）

ただの思いで理解し聞いてくれたのかは全くもつて定かでない。

少々歴史を紐解いてみた。2年制だった愛媛県立衛生検査技師養成所が医療技術大学臨床検査学科の発祥元である。堀之内にあったと聞いている。その後、3年制の愛媛県立臨床検査技師専門学校（当時の生活センタービル内）となり、そして砥部へと移り（1988年）医療技術短期大学臨床検査学科となり、2004年に今のが医療技術大学臨床検査学科が開設となつたのである。生徒数は2年制時代は20名、専門学校時代は45名、短大となり約60名、大学となつて約80名と変化したようだ。そして3年前には医療技術大学大学院が開設された。今後は臨床検査技師も6年制時代が訪れるのだろうか。

学校教育はこのように随分進化を遂げてきた。臨床検査技師は進化してきているのであろうか。今、昭和33年発足の臨床検査技師等に関する法律と医療法の改正も行われようとしている。医療業界の進化のスピードはめまぐるしい。そんな変化に耐えうるだけの忍耐力と持久力も必要であろう。そして今置かれている医療情勢の中の自分たちの立場を理解し、その変化に対応できる柔軟性を持つ技師であることが重要である。そのための教育体制が構築されないといけないと思つてているこの頃である。



進化

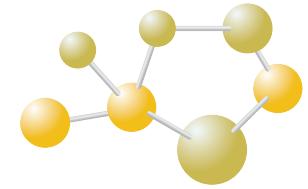
県立中央病院 検査部技師長 森 いづみさん（臨床検査技師）

日射しを浴びながら昼休みにキャッチボールやバトミントンを興じていた学生時代。
市内の県関係施設の一部にあつた専門学校時代の事である。なんどのどかな光景である。現在の学生はどういう時間の過ごし方なのだろう。

昨年、初めて大学の教壇に立ち学生に向けての講義らしきものを経験した。90分授業は昔と変わらない。専門学校だった我々は、狭い教室で15名だけでの授業だったが、大学となつた今は他科の学生との合同授業で100名ほどであつた。マイクを使って講義するのは当然である。広くて後ろの方はまるで見えないと思っていたが、教壇というものは以外にも全体が良く見える。午後一時からの授業といえば睡魔との戦いである。15名で満杯の我々の教室は一人一人が良く見えたことだろう。先生はやる気のない生徒を視ながら教鞭を奮つっていたのだと反省の念に駆られた。90分間喋り放しは不思議な達成感で満ち溢れ、自己満足の域に達するものであった。お蔭で貴重な体験を味わうことができ自分の新たな部分が開発された錯覚に陥つた。さて生徒の方はと言えば果たしてどう



2016年度TQM（総合的質管理）サークル活動発表大会にて病院長賞受賞（検査部のスタッフ・みきちゃん・ダークみきちゃんとの記念撮影）



小児看護専門看護師として 看護をする中で感じること

愛媛大学医学部附属病院 小児科病棟 向井 博幸さん（看護師）



私は子どもの笑顔と素直なりアクションに惹かれ、小児科を希望しました。小児看護をする中で、子どもの病気が良くなればと感じながらも、子どもや家族の主張に振り回され、思うように支援でききないでいることに無力感を感じていました。専門的な知識を踏まえ病気を持つ子どもや家族の看護をしたいと思い、大学院に通い、その後、小児看護専門看護師を取得しました。

私が取得した専門看護師とは一体どのようなものなのでしょうか。専門看護師の言葉は看護雑誌の記事には必ずと言っていいほど掲載されていますし、日本看護協会では専門看護師の6つの機能（実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究）が紹介されています。しかしながら、県内では専門看護師は10数名しかおらず、身近に実感できる機会は少ないのではないかと感じています。小児看護専門看護師では小児に関わる困難な事例に対しても子どもや親の権利を考えながら、実践し、ときにアドバイスを行うことが柱となります。さらに、入院患者さんは退院後の生活を見据えて、できるだけ不自由を感じない生活ができるか、学校に戻ることができるかといった視点を考え、入院中に退院生活を調整していきます。また、院内外を含めた小児看護に関する勉強会の開催や、研究を行なうことで今後の看護への貢献も含まれます。

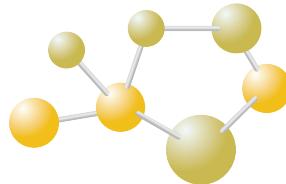
小児看護をしていて日頃考えることは、「看護することとは?」「自分ができることは?」についてです。多職種での連携が問われる中で、看護師の役割を考え、行動できることが大切だと考えています。また、私が理想とする専門看護師は、「子どもの下の力持ち」ではないかと考えています。子どもや家族と関わる中で、子どもが病気と向き



向井 博幸（むかい・ひろゆき）
2002年3月 愛媛県立医療技術短期大学第1看護学科卒業
2012年3月 高知県立大学大学院看護学研究科卒業
2012年4月 愛媛大学医学部附属病院入職
2012年12月 小児看護専門看護師資格取得

合えたり、家族がそれぞれの役割を担い、結束することができます。そこで、看護スタッフに対しても同じように私たち個々が持つ看護の力を引き出し、次に同じような状況があった際には自分で出来るようなサポートができること、そのような役割であると感じます。まだまだ、十分とは言えませんが、絶えず自分の行動を振り返り、次に生かせることができていればと考えています。

今、勤務している病棟の子どもたちは、体が小さいながらも一生懸命さがあふれていると感じています。それに寄り添う家族は、家庭で育児しながら、病院でも付き添いをしながらの日常生活を行っており、本当に頭の下がる思いを感じています。退院し、身近なお家で過ごす子どもたちが元の生活に笑顔で戻ることができ、また、家族が一つとなつて生活できるようなサポートができるばと考えています。



助産師としての役割

県立中央病院 総合周産期医療センター 曾根 梢さん (助産師)



スクを持つ妊産婦の看護を深めたいと感じたことが一つの理由です。妊娠経過とともに合併する疾患や病態を理解しながら、精神的な面ではどうかをより深く考えたいとも感じていました。4年目に突入しようとしている今、経験してきたことや学んだことは多くありますが、依然として経験豊富な先輩方をお手本にし、学ぶことが多いです。助産師としてその家族の人生の始まりの瞬間に立ち会える喜びはとても大きいものです。ハイリスクの状態にあっても妊娠を継続し安全に子どもを出産できる喜びや今後の子育てへの意欲が持てるような支援を続けていきたいと思います。これからも信頼される助産師として、関わるご家族の思いや希望に沿った看護が行えるように知識と経験を積んでいきたいと思います。何より安心して妊娠・分娩・育児が行えるような情報提供や環境づくりも大事にしてきたいと思います。

私は、総合周産期医療センターとして指定されている愛媛県立中央病院にて勤務しています。主にMFI CU（母体・胎児集中治療室）にてハイリスク妊娠婦を対象に、365日24時間体制で救急母体搬送を受け入れています。母児の生命に直結する仕事でもあり常に緊張感ある現場で、高度な医療が求められています。助産師としての役割は幅広く、妊娠・出産・子育てにまで至ります。私が助産師を志したのには、看護学生の実習でお産の場に立ち会うことができたのがきっかけです。命の誕生に感動したのと同時に、母親の産む力を最大限に引き出してそつと寄り添う助産師の姿とその役割に感動を感じました。

総合周産期医療センターでは正常分娩はもちろん緊急性を要する妊娠婦さんが入院しています。未熟児や何かしらの障害を抱える児が生まれることも事実です。対象とする母児によっては、当事者や家族への支援が退院後も継続されるよう情報提供を行い、保健師など多職種と連携しケアにつなげています。ご家族が現状を受け止めて、児に出来ることは何かと考えていけるように精神的な面においてのケアを常に心がけています。当病院で勤務したいと感じたのも生まれ育ったこの地域でハイリ

曾根 梢 (そね・こずえ)
平成25年 愛媛大学医学部看護学科卒業。（看護師・保健師免許取得）
平成26年 愛媛県立医療技術大学助産学専攻科卒業。
(助産師免許取得)
平成26年度から現職。

愛媛雑感

は行つてみたいと思い、先日車で鬼北町まででかけました（その後、職場の先生達を誘い再度伺いました）。そして、宇和島まで足を延ばし、昼食に郷土料理の“さつま”を食しました（宇和島での昼食は、その後も“さつま”です）。

宇和島は、人口減少で…と言う話で身赴任して四年を迎えました。東予、中予、南予とはなんぞや？と思いつつも、昨年は愛媛県内を車で走り、その地域の気候風土や文化などを知る事ができました。こんなに変化のある県はなかなか国内でも数少ないのではないでしようか。

私は、生まれも育ちも関東ですが愛媛に縁があるようになります。大学院時代から今もお世話になっている恩師のお父様は、垣生町のご出身だそうです。「垣生」を“はぶ”とはなかなか読む人は少なく、“かきお”と間違われると良くおっしゃられていたことを思い出します。また、愛媛への赴任のきっかけとなつたのは、大学時代の同級生が、愛媛県内ばかりでなく全国的な立場で活躍されていることもあります。愛媛にいる間にそのお店に、一度

の帰りに、美味しいみかんを購入しました。宇和島吉田町のみかんが、美味しいのは厳しい環境のなかで育つていること、そして、人の優しさを受けて育てられていることを知り、人間の成長に似ています。そこで、愛媛に雪が降るという認識があります。まして、みかんの産地で

私は、愛媛への赴任を通じて、多様性ある学生を育成し、県内ばかりではなく県外や国際的に活躍できる人間を育てたいと思っています。そして、愛媛の地に新しい風を起こして欲しいと期待しているところです。（H・T）



国道56号線より法華津湾を望む（筆者撮影）



情報発信	調査研究	人材育成（一般）	人材育成（専門職）
活動報告書作成	えひめ高校生生体機能研究プログラム えひめ高校生出張講座／メディカルトーク いのちを守るお仕事体験 地域包括ケアシステム人材育成事業 思春期教育教材DVDに関する評価調査	ホームカミングデイ 看護実践セミナー 卒業生のための研究相談 思春期スキルアップセミナー	
地域貢献グッズ貸出し			

平成29年度活動予定（抜粋です）

「地域に開かれた大学を目指している
活動拠点としての地域交流センター」

県民すべての保健・医療・福祉の増進に寄与することを目的に活動し、本年で13年目を迎えました。地域交流センターはこの目的実現にむけ、①人材育成機能、②調査研究機能、③相談支援機能、④情報発信機能の4つの機能をもち、本学の施設、設備と教職員、学生ボランティア等の人材を活用した事業を展開しています。

平成28年度の活動の一部を紹介します

リレー・フォー・ライフ・ジャパン
2016えひめ
がんサバイバー・家族の希望や思いを胸に学生・教職員がたすきをつなぎ、時間歩きました。

（エミフル松前にて）